

de Jong 教授回想二題

原 実

世の中には『かけがいのない人』というものがあるが、日本のインド学仏教学にとってまさに『かけがえのない存在』であり、又本学が初代客員教授として招聘する栄誉を担った J.W.de Jong 教授が、西暦2000年も始まったばかりの1月22日の早朝この世を去った。前夜8時頃三重大大学の斉藤明氏より電話があつて、大正大学の鈴木晃信氏の伝える所によると、教授が重態に陥り、この一両日が極めて憂慮すべき状態であると知らされた。その直後鈴木氏より同趣旨の電話があつて眠れぬままにその夜を過ごしたが、翌早朝再び同氏から電話があつて教授の訃が報じられた。

順逆何れの意味においても彼ほど日本の学問、就中仏教学に理解を示した学者を私は知らない。戦前には S.Lévi の名を挙げる事が出来るが、私の知る限り戦後では彼こそまさにその筆頭であった。彼は語学力に秀でて西洋語に極めて堪能であったが、東洋語も Paris は P.Demiéville の下で中国語と日本語を学び、邦語の研究文献をかなりの速度と恐るべき正確さをもって読んでいた。刊行される夥しい数の研究書を読破しては厳密な書評を公けにし、その数は他に冠絶していたが、日本の仏教学者に対しても独自の評価、判断の基準を持っていた。個人的にはかなり率直な意見を吐いていたが、公表して個人攻撃するようなことは曾ってしなかつた。そこに銜学の嫌いなく、鋭いながらその人格を反映して稟とした気品が漂っていた。勢い日本の学者がしばしば研究史を無視して大著を公刊し、論文を発表する事に極めて批判的であり、健全な書評の伝統がこの国に育たぬ事を常に慨嘆していた。

近時の日本の仏教学が、少数の例外を除いて梵語原典でも、巴里語原典でも、西藏語原典でも、又中国語原典でもなく、ただ国訳一切経と南伝大蔵経に拠っていることも彼はつとに看破していた。原典への眼の欠如が日本の仏教研究の救い難い欠陥であると言つて、早くから大正大蔵経の批判的出版の必要を唱道し、訪日のたびに仏教学者を集めてはその持論を実例を示して説いていた。仏教伝道協会が大正大蔵経の英訳の企画を発表した

時、彼は慨嘆して、それをする以前に日本の学者には為すべき重要な仕事があると強調した。それは正論であったが、共鳴する有力な仏教学者が日本に現れなかった事は最後まで彼の心残りであったようであった。たとえ批判的であったとしても、彼ほど日本の仏教学に関心をもった人はいなかった。その意味で彼の死は惜しみても尚余りある。

筆者はもとより仏教学者ではないが、初めて彼と文通したのは今を去ること43年の1957に遡り、その半世紀に及ぶ交遊関係は、私が東大を退職して年金生活に入り、一切の学会より退いた後も、終始変わる事がなかった。その業績と日本学者との交遊については別に稿を改める機会があると思うので、ここでは取り敢えず交遊の発端物語と、その後の教え子を通しての交遊を、懐旧の思いを籠めて綴り、以て教授の学徳を偲ぶよすがとする。

(1) 『de Jong 教授との出会い』

現在でこそ *Indo-iranian Journal* は国際的に最も評価の高い学術雑誌となっているが、その初期は未だに得体の知れぬものであった。私は誠に不思議な縁でこの雑誌にその初期から係わりを持つこととなったが、その経緯を以下に略述する。

弱冠24歳、生意気盛りの1955年秋、私は中村元先生の推薦によってアメリカのハーヴァード大学に赴き、D.H.H. Ingalls 先生の学生となった。先生はその年に *Sarva-darśana-saṃgraha* を読まれて、学生にその中から自分の興味ある章を研究してみるよう指示された。先生は私にその第2章、即ち *Bauddha-darśana* (仏教) の部分を勧められたが、この部分は曾って de la Vallée Poussin が徹底的に研究し尽くしていたので、私は寧ろ別の部分をやってみようと思った。そしてどうせやるのであれば Poussin の方法に則って特定の章を徹底的に検討してみようと考えた。1956年の夏休み、私は図書館に籠もってその第6章の分析を試みた。三ヶ月にわたる夏休みが終わってその秋、私は Ingalls 先生にそれをお見せしたところ、先生は大変に喜ばれてこれを出版してあげようと言われた。もともとこの先生は若い学者が論文を発表するのを寧ろ禁じられていたので、私はいささかびっくりした。先生は *Journal of the American Oriental Society* か

Harvard Journal of Asiatic Studies かのいずれかがよいと思うが、何分にも両者は有名な学術雑誌であるから、刊行まで最低二年は待たねばならぬであろうと言われた。私はその時未だ日本語を含めて一篇の論文も世に出した事がなかったから、処女作がこの二つの雑誌のいずれかに出るなど誠に夢のような話であった。少々時間がかかってもよいから、この二つのいずれかに出したいと思って先生に、後は一切お任せ致しますと申し上げた。

二三日後に私は先生から呼び出されて『実は最近新しい雑誌がオランダから出るようで、自分はその編集委員の一人に選ばれた。来年第1号となる予定であるから、こちらの方が早いと思う。そして編集長は自分の旧友の de Jong という男だ』と話された。率直に言って私は不満であった。前述の二つの雑誌なら誰でも知っている権威あるものであるのに、未だ名も知らない編集長の新雑誌など嫌だと思ったが、先生のお言葉であるから致し方ないと思ってすべてをお任せする事とし、その段階で原稿を先生にお預けした。

それから何ヵ月か経った或る日のこと、オランダのライデンから私のもとに突然手紙が舞い込んだ。見るとそれは例の de Jong という人からのものであった。何事であろうかと開封すると、何とそれは質問状ではないか。『お前の原稿を読んだが5箇所ばかり疑問点がある、それにきちんと答えるのであれば我々は雑誌に掲載する用意がある。さもなければ不採用とする』というのである。これには全くびっくりした。早速 Ingalls 先生にお報せして、急ぎそれに対処する事とした。質問の中の一つは先方の誤解であったが、残余の4はいずれも正鵠を射たものであった。そしてこの未だ見ぬ de Jong なる人は大変な学者で且つ極めて厳しい人であると思ひ、又とんでもなく恐ろしい雑誌に投稿してしまったものであるとの感慨を新たにした。

今にして思えば当時 de Jong 教授は34-5歳であった筈である。由緒あるオランダのライデン大学の教授という肩書があるのみで、殆ど著書もなく論文らしきもの知らなかったこの新進気鋭の学者は、一体どういう人なのであるかと、私はその頃思いを巡らしていた。何れにしてもそのよ

うな経緯を経て何とか1958年2月、私の処女作は Indo-iranian Journal の第2号に掲載され、その後1963年教授の初来日時に彼との拝眉が叶った。眼は流石に鋭かったが、大声で笑うその人柄には親しめそうな感じがしたものである。

(2) 『遙かに宋土の知識を訪ふべし』（de Jong 教授と留学生）

de Jong 教授というと、私の場合直ちに道元の『宋土の知識』を想起する。道元はその『学道用心集』第五『参禅学道は正師を求むべき事』の中に次の如く言う。

『行道は導師の正と邪とに依るべきか。機は良材の如く、師は工匠に似たり。縦い良材たりといえども 良工を得ざれば奇麗未だ彰れず。縦ひ曲木といえども 若し好手に遇へば妙功忽ち現わる。師の正邪に随って悟の偽と真とあること、これをもって暁るべし……みなこれ師の咎なり、全く機の咎にあらざるなり……哀れむべし、師たる者、未だこの邪惑を知らざれば、弟子何すれぞ是非を覚了せんや。悲しむべし、辺鄙の小邦、仏法未だ弘通せず、正師未だ出世せず。若し無上の仏道を学せんと欲はば、遙かに宋土の知識を訪ふべし……正師を得ずんば、学せざるに如じ』

ここに、仏道を学問に置き換えて、現代語に訳して大意を取れば、次のようになる。

『学問は教師の善悪による。学生は良い材木の如く、教師は大工に似ている。たとえ良い材木であっても、良い大工に会わなければその良い資質が現れない。たとえ曲がった材木であっても、良い大工に会えば効果観面である。教師の善悪に従って学問の成否ある事を知らねばならぬ…それは教師の責任であっても、学生の責任ではない。教師たる者がしっかりしていなければ、学生はどうしてよいか判らぬ道理である。残念な事に我が国には学問が未だ本式に根づかず、良い教師が未だ現れない。若し本当の学問をしたいなら、外国の学者に就いた方がよい…良い先生を得ないのなら、寧ろ初めから学問などしない方がよい』

この中でも最後の『正師を得ずんば、学せざるに如かず』という部分は人を教える立場に立つ者にとって極めて厳しい文言である。特に最高学府に教鞭を執る者にとっては誠に恐ろしい。私は1960年以来、辻直四郎先生の後任に選ばれて東大に31年間専任教員として教鞭を執らねばならなかったから、久しく正にその恐ろしい立場に在った。

東大には当然の事ながら毎年日本で最も優秀な学生が入学してくる。彼等は上に言う『良材』に他ならない。その中の極めて少数ではあるが我々の学科に進学してくる者がある。彼等を指導してその優れた才能を引き出し、『妙功を現ぜ』しめるのが我々東大教師の務めでなくてはならない。さもないと『良材』はあたらその『奇麗』を彰わさずに朽ち果てる。しかし不幸にして『工匠』たる教師が、最初から自分の能力の限界を知っている場合には、その様な立場で彼はどのようにしたらよいのであろうか。

私はまさにその様な立場に立たされていた。良材たる彼等に Ph.D. の論文を書かせて完成させる自信もなければ、学力もない。目利きの学生は早々に見限って私の許を離れ、他に師を求めた。それは悲しいことであったが、現実がそうであるから仕方がない。しかしそれでも尚、私に就いて来る若者があった場合、彼等に対してはどうしたらよいのであろうか。

その解決法はこれら優秀な若者を本式の学者の所に送り出す以外にない。それは上の『遙か宋土の知識を訪うべし』に相当する。でも、修士 (M. A.) 論文作製段階までは若者に独創性を要求される事はない。従ってそこまでは私でも何とか指導出来ると思った。若者の関心と能力に従って、私が理解出来る範囲のインド学の中の極く限られた分野の中から幾つかの題目を選ばせ、その分野における研究史を提示してやれば、一応彼等はその学問分野の『研究の現段階』を知る事が出来、又方法論を身につけて、学問の Orthodox なレールに乗る事が出来る。その点は流石に天下の英才が集う所であったので、教師が無能であっても何とか勤まったのは幸いであった。

しかし、私が教え得るのはそこまでであった。その先、即ち彼等にその分野において独創的な研究を完成させるには他力本願とならざるを得ない。そこでどうするか。私はこれら若者に彼等が専攻した諸分野の世界一流の

学者の名を示して、若者に若し意思があれば紹介して上げるから留学してみないかと勧めるのである。若者が同意して『その先生に就いてみたい』と言った段階で、私は留学の手筈を整える。それはどういう事かというと、先ずこれらの学者の近著を私自身が精読するのである。そしてその感想を纏め（場合によっては東洋学報その他に書評を書いて同封し）、尊敬の念を籠めて当該の学者に直接手紙を書く。『実は私の所にいる優秀な若者が、たまたま貴方と同一の専攻分野に在り、M.A. の論文を完成した。私にはしかし彼をこれ以上指導する能力がない。就いてはこの若者が貴方の下で研究を続けたいと希望しているので、彼を受け入れて頂けるであろうか』と極めて丁重な態度で、図々しくもこれら大先生達に頼み込むのである。すると大抵の場合は先方から色好い返事が来た。それは明治以来、私の先輩の先生達が必死の思いで築き上げて来られた『東大の信用』のお蔭であった。私はただそれに便乗したに過ぎない。それは本当に有難い事であった。

場合によって、たまたま来日している一流の学者があると、私は若者をして無理やり彼等に会見させた。私はただ彼等の間に立って紹介すればそれで済んだ。外人学者と若者が話し合っただけで接点が見つかればその場で留学が解決した。これ又先輩の築いた外への『東大の信用』と、内に育った彼等自らの『英才』のもたらす結晶化合物であった。

ただ翻って『正師にあらざる』自分自身に思いを致す時、思えば情けない最高学府の教師である。でもこれ以外に方法がないのであるから仕方がなかった。思いがけない結果を招いた少数の例外を除いては、幸い我が教え子は私の推薦を多とし、感奮興起して私の期待に応えてくれたから、先方の先生達の中には以後私を信用して、次から次ぎに若者を引き受けて下さる方もあった。その中で最も私が御世話になった『宋土の善知識』が他ならぬこの de Jong 先生であった。

その第1号は湯山明氏であったが、先生は上に述べた様な事情で以前から私を知っていて下さったので、既述の複雑な事はしないで済み、事務的な手紙だけで事が運んだ。その後、津田真一、斉藤明、松村恒、安藤充と続いたが、この他にも宗門大学の先生からお頼まれした場合も少なくなかった。彼等は現在日本の仏教学を代表する学者に成長している。それは de

Jong 教授の学殖のほんの一部を反映したものでしかないけれども、彼等の輝かしい業績によっても象徴されるように、教授の20世紀後半における本邦仏教学への貢献たるや誠に偉大なものがあつた。一方、私はこれら教え子達によって更に先生の信頼を得ることとなつた。まさしく天下の英才を門下に集め得た者、教師冥利に尽きる。